

婦人關係資料シリーズ
一般資料第20號

農村生活をたかめるための演劇脚本集

—懸賞應募作品—

労働省婦人少年局

はしがき

婦人少年局では、生産者としても、家事担当者としても、重要な役割を果たしている農村婦人の生活をたかめるために、一九五二年八月から九月にかけて、「農村婦人の生活をたかめる特別活動」を行い、その一環として、活動の趣旨に副った演劇脚本を募集いたしました。こゝに収めた五篇の脚本は、その折の応募作品一二四篇の中から佳作として選んだものです。

一九五三年二月

労働省婦人少年局

目次

入賞作品について……………一頁

一、妹の結婚……………二

二、春日遅々……………一五

三、まごころ……………二七

四、空梅雨……………四一

五、かまど……………五五

入賞作品について



募集規定では、優秀作品一篇、佳作三篇をえらぶことになっておりましたが、優秀作品に該当するものがないため、佳作を二篇追加いたしました。

作者の氏名（筆名はそのまゝ使用）と作品の選定理由は次の通りです。

妹の結婚

北海道 札幌 三郎

愛情と理解に基いた結婚を取扱ったものとして、また農村生活をたかめるために努力する青年の意欲にふれた作品として選ばれました。脚本も洗練されており気品もありますが、脚本が長く動きが少いので、どちらかといえば朗読用の脚本として適当と想われます。

春日遅々

福岡 佐賀 志乃天

生活改善の取上げ方としては少し安易だといえますが、同様の問題を取扱ったものの中では、若人対青年の気持の交流が比較的豊かに描かれており、娘の農村の肉體にもふれている作品として選ばれました。

まごころ

長野 滝沢 千絵子

全体がきれいでとすぎ、脚本にも生硬なところがありませんが、農村によく見られる道徳の問題を通して民主的な家族関係が描かれており、また未亡人の立場、婦人と販賣の問題も含まれてい

空梅雨

広島 吉田 五郎

夫婦の協力による経営の合理化、その根本になる民主的な夫婦関係などがあまり露さず描かれていまず夫婦の会話には不自然な箇所もありますが、それがかえってユーモアを感じさせ

かまど

愛媛 横瀬 新二

定率の扱い方が少くどい感じですが、迷信の打破を取上げたものがかなりありましたので、農村では必要が感じられているものと考え、同様の作品の中では、生活改善の問題が積極的に

盛られているこの一篇を選びました。

(4)

「おつてくれ、は、そりや、小姑は多いにしても
学校とか何とか……とにかく教育もある癖な
んだしね、オーアそこにも付ければ、まあ重いの
のひとも持たなくていいよ……」奥様
「みたいに暮せるといふもんだ、何が不足な家だ
もないし、子供でも出来れば、あとは、その子
供を相手に——育て、さえいけばいい……」
それで……牧子が、どういつてきたのかい。

耕作——牧子がね、今日帰るのは、ほんととはそ
のことなんだ。

もと——寂談にするつていうのがい、こちらか
うさんざ頼んでおいて……それをいまになつて
……
耕作——そりやね、母さん、よくよく考えあつて
のことなんだ。だから……

もと——考えあつてのこと、つたつて、お前考え
てもごらん、勤め人の嫁になれるんなら、いま
いで父さんの病氣やなんかで、あめ子も人一倍
の苦勞してきたんだ、街で習いものも身につ
けて……どの申度もあつたというもんだ。それ

……何か手紙でも結したとでもいうのかい、
それで……?

耕作——いや、だ……牧子はほんとに里塚との
方のことは知らないんだし……（いらいらさを
紛らすように縁側の作業をばじめながら）母さん、大ニ
君が野帳に行つてゐるの知つてゐるでしょう、
もと——（大ニという名で、急に不快な顔になる）あ、……

……お前もなんだよ、父さんの具合をえよきや
おなじに、たつたひと夏のことだからね、勉強
にやりたかつたんだが……いまの悪いものは
なんといつたつて、教育がないと世間向きにも
……なんだしね九、やつぱり今では、英語の言
葉のひとつもおぼえていないことには……あ、
な上村の息子に預けさせたくなかつたつて……
ほんとに父さんも、私も……お前には済まない
と思つてゐるんだよ、この間も云つてたんだが……

耕作——母さん、

もと——（ハッとして）それでは、あれかい。大ニ
さんと牧子が、一緒にゐるとでも。

(5)
耕作——まあ、まあどういふことなんだけど、
もと——まあどういふことなものにあつたもんで

に家にしたつて、あれがおかしなところの嫁にな
つて、いつまでもつら（思ひをするのは、やつ
ぱりたまらないしね。

（間）

耕作——牧子は、母さん……やつぱり、百姓を
やつてく氣なんだよ。

もと——じや、なにかい、牧子が嫁にいくのをや
めて百姓をやつていくというのかい、……馬
鹿な子だよ。

耕作——どうでなけんだが……
もと——どうでなけんたつて、嫁にもいかなんか
なつて……だから都会にでて、少し余計な
ことを覚えるとすぐにそんな変つたことにかぶ
れてしまつて……（うかううように耕作をみつめ
る。それから）耕作、牧子はあの……なんだか
しらないけど、そのお、思ひとか——からそん
なことを云つてゐるのかい、

耕作——（苦笑して）うん、いや、嫁にいつて
まあ百姓をやつて、部落にいたいというんだ、
それには……
もと——部落のどこかの嫁に、なに……牧子が思
ひ、上村の家になんか、お前、それに……
耕作——だから、母さん、よく、とつくり海えて
ほしいんだ、なあ、そんなにムキにならなくつ
たつて……

もと——それでなんだね、困つた顔して……牧
子が大ニさんと……それは、牧が自分で云
つてきたことなのかい、いつたかい、
耕作——うん、まあ、

もと——うん、まああつて……お前の手紙にはそ
う書いてきたんだらう、……人もあろうというも
んだ、

耕作——そうはいつたつて、母さん……母さん
は大ニ君を別によく知つてゐるわけでもないんだ
もと——知らなくつたつて……お前、考えても
ごらん、嫁にやる、もらうはなんと云つたつて
家と家との向が向違なんだからね、嫁にいつて
苦勞したり、家はしな（い）でも余計なことでも
ら（い）思ひをし（ない）で済むというの……みんな
さんな女の子にしてみれば一生のことが決つて
しまふんだからね、出来ごころやなんかで……
上村の家とはね……様にも扱んで……そりや、

男のお前にはわからないだろうなね……母親にしてみれば、娘が生れたときから、ほんとに死ぬまで……、嫁にいくまでは、どんなことがあつたとしても、怪我や間違ひのないようにと、ほんとに何から何まで心配してくる考えてくるもんだからねえ。里塚のことまで語があつたときは、これでほんとにどうやら、やれ／＼と思つて……ひとり残つた娘だつたからねえ……、特別になにして……、それを決りせうだと云われなときは、ほんとに夜も眠を高くしてねれたいうもんだつたのに……

耕作——母さん、だからね、母さんが牧子のこと、を心配してゐるのは、そりやよくわかるさ。牧子にしてもおんなじことなんだ、だから、今度のこと、牧子も俺も、よく考へてのことなんだし、手紙では大ニ君ともよく話合つてあるもど——上村の家にかざり、私は……、ほんとに……

（指を動かしてゐる）二十年も前からのことだよ、耕作——（暗然とした面持で）二十年と云へば、牧子が生れた前後から……

もど——お前達には話してなかつたかもしれぬい

きだしてしまつて……私の方だつて、特別に、新築所で作つてもらつて用意してゐた晴着だつたんだけど、なんだかもう、世の中が真暗になつて……父さんに重なつて、人がなると云われたかそんなこと何も耳に入らず……。あのひと月というものは、二人ともすつかり世間ないやになつてしまつて、人の顔を見るのも辛くて……、いつせ、常呂川に入つて死んで——とまで考へたんだ。お前のお祖父さんが未だ存命のときだつたから……、ほんとのこと云へば、お祖父さん、実はそのことのため、死んだようなもので……。わすか、三月の初とだつたんだからね、それが誰がやつたことか、上村の親爺だつたんだよ。あとで役場の吏員さんが、殆どしらみ潰しの調べで分つたのさ。その理由といつて、二年程前に馬市の雨催のときに主だつた切子を、していた父さんが、部落のことを考へて、上村の云うことに反対して、馬喰と直接接衝にまゐりかゝることに成功したという事があつたくらいのもので、別段、恨みを買つたこともなく仲良く

が、あのときは、父さんは、上村のため、どんな恥づかし目の目にあつたか、大変な村中の騒ぎだつたんだから……。丁度、道方から長官やなにか偉い人達が、この地方の代表的農家といふことで、奨励観察があつたのだよ、父さんはその頃まだ若かつたが、陽灼けた顔を喜びでいつはいにして、もう朝から、なんだか、おるおるしてね……。いよ／＼という時は、すつかり羽織袴で、いまのこの畑を、向うの防風林になつた辺りまで、先導申し上げて、作物をこらんにいれたんだよ……。それがねえ……。とてもないことになつて……。行つてみると、前の晩まで、草のひともないように手入れをすつかりおいたビート畑に、お前、とんでもない悪戯書きが、それも大きく、豈半分くらいにも、デカ／＼としてあつたんだから……。準備もたいたつて云われてた自分の父さんが、案内の施子を持つたま、顔をどす黒くしてしまつて、汗をいつはひ噴きだして、なんだかもう、甲斐なくて、長官の方にも向つて腰をうついて、へなへなと頭を上までさげたつさり、おいおいと道

やつてきていたんだから……。それがわかつたときは、さすがの父さんも、それは／＼怒つたり、泣いたりして「これから死ねまで、上村は人間だと思ふぬ」と云い／＼してね……。あんなとき以来というものは、上村とは口もきかずになつたものも無理はない。父さんも私も作働つくりが、たつたひとつの命、みたいなもので、その百姓の、たつたひとつの命を汚されたようなんだから……

耕作、上村の家だつたのはほんとにお前や牧子が云つたつて……。それは……

耕作——母さんや、父さんの死持はわかるさ、だけれど、もう二十年も前のことで……。そんなに、疲困地になつて……。だつて大ニ君や……。もど——大ニさんの家は上村の家だよ、お前。耕作——だつて大ニ君にも、牧子にも、そんな二十年前のことでも不幸な目にあわすこともないんだ……。いつか話したから、母さんも知つてゐるでしょう、今度、大ニ君や牧子が帰つてくれば、部落の若いもん、が集つて勉強会をやる、やつぱり今じ、昔と違つて、こんな移りのは

げしい時代に農家をやつていく以上、いろ／＼と協同の仕事とか、経営の単位を大きく合理的にしていくとか、重麻や盛壽会社との接衝を百姓が不当に堪忍したり、苦しめられたりする。ことのないうちに、それから世間の事情やなかまを、よく研究していかねばいけません。こんな食材はいつまでたつてもよくなりはしな、そんなふろにして君は着同士が寄集つて、研究していくにしても、随り同士で、何年も何年も、うちと上村さんみたいに、背中合せにいらんことがあつて、これ……もう、たゞ二つの家のことだけでない責任があるんだよ。なあ、姐さん。

もと——なに、それで……みんなして、大ニさん
に餃子と一緒にして……、そりや、お前、政略
結婚というあれに……、

耕作——母さん。大ニ氣は敗子が好きなんだ。(へもとはハツと耕作を見つめる。耕作はせの頬をさけて)……だからいつぞ、一緒にして面方の家が改めて親嫌になつて、友がよくやつて行けば、部落のためにもなることだし、本人同士も満足なんだ。

寸、魚でもたまれば、もうすぐあんな真似をする。そんな家に嫁にいつて、百姓を本気で、みんなのためにもやろうなんで——、お前、敗子は、ねんねだよ。

耕作——ねんねでないさ。せんなこと、母さん云
つてながら、ほんとに、百姓がなにか一生働き
づくめで馬鹿な仕事みだりに思つて、敗子は里
塚にやるうとしてるんだ。

もと——だつてねえ……（間）（雨の音、ひときわはげしくなる）なに……お前、さつき、おの子は大ニさんが好きだつて云つたね。

耕作——うん、好きだつて……。そんないろ／＼あること考えた挙句、部落に帰つて、一緒になつて、百姓も一生懸命助け合つてやつて、いい部落にしようと、ほんとに希望をもつて、帰つてくるんだ。今日は一結の汽車でくる。

もと——（ぼんやり放心に陥つてゐる）なん時の汽車だ
耕作——二時十向分からだから、もう迎えにいかな
きや————集会所に一時寄つて歸るから、うん
勉強会の打合せでね——、それからだから、牧

から……そう思つてね。牧子はやつぱり百姓をやつていくと云つてゐんだ。

もと——そんなうまいこといくものか（な）い
 ずの若いものは、社会主義かどうの、資本主義
 だ買物だかなんかしらないけど、何でも自分を太
 きくものを考えるように学校でもどこでも教わ
 つてきて……それはい、んだけど、やつぱり
 百姓は埋居より、土がオーだからね。土地と作
 物に、ほんと（う）いうか、尊敬……（適當な言葉を繰すが、
 心当らない）ぞら、お前達の恨てゐる部屋（へや）の壁に
 入つてゐる……

耕作——ミシカ

もと——何だかしらないけど、娘の目暮れに、こゝろして耕っている……あれは夫婦だつたね。」

あゝしている氣持が何より一番大事なことなん
でね、ほんとに土に生きるといふ。あの氣持を
や、轉に氣持……。上村の家では、お前、知
つてゐるかい。雨の日に納屋で仕事するのに、ラ
ジオをきくながらやつてゐる。あれは何かいな
せん、ラジオの歌きながら、心のもちな
仕事して、それで百姓といえるものかいな、一

子も少し遅くなる

（間。二人別々の氣持の上で放した様子、表橋）

耕作——なあ、母さん、大二君だつて、学校もで
て、今では街で居つて勤めたりなんなり出来
るというのを、やつぱりいい百姓になるさつて
帰つてくるんだから……。牧子だつて、秋
あ、母さん。俺はもう駅に行かなきゃならんけ
ど……。

(父) 作造が平をさし、危い足取りで入口から腹き込むようにして入
つた。

二景作造もと、耕作

耕作——あゝ、父さん。雨のなか

作造——よう、降るわい。作物もひと恵だろう。

「……いや、なに、そんな廻つとりはせんわい」
 (翻译作鳥をとろうとするのを遠慮する)「そうだな。(博士
 プラウの病にあらして) 薄荷刈りまでには体もなんと
 か。」

耕作——父さん、結構、偉達だ！でやれるんだもん、そんなに氣をつかわなくたって……
やつはり、父さん、……助いてる方が素なんだ

「なあ、すつかり顔も陰気になつて……」
 作造——ほんとだ、どうも悪いときからの物
 ざぐざぐというのか……百姓は野良に出て、お
 天道さまに吸らされて、うまい空気を一ぱい吸
 つているのが一番だわ、ねてて新聞やラジオも
 「一寸も楽しくないもんだ。野良が一番だ。野良は
 せいもんだ……」わしも疲痛んでみよるかい
 な。

新作——まだ、無理だなあ。

もと——（意を決したように）父さん、きいたんか
 い、牧子のこと。

作造——今日、帰るつて、良子が帰来定件つとる
 わ。（好々爺然と相好を崩す）

もと——牧子が大二さんと一緒に帰つてきて、上
 村に、嫁にいくというんだが……

作造——なに、上村の家。

もと——なんだか、理屈やら想像だか沢山あるん
 だぞうだけど……里嫁の方も切つてくれとい
 うんだよ。

作造——馬鹿な。（止まる。感嘆はしく）本気なんか
 新作。

（新作は息で、この不首尾を告げる）ええ。

耕作——時間がなにか、すぐ眠にいくけど……

なあ、母さん、良子、父さんに話して聞いておく
 れよ。……い、な……父さん、ね。

（耕作は、三人をふり廻りながら、危足で去
 る。三人、沈黙のまゝ、彼を見送る。もとは大き
 く吐息して仕事を所在なげにはじめる。父作達は
 何んやりと腰をおろす。気力の成けた感じ。良子
 の心配げに二人を見守る顔。雨しきり）

（舞台、しずかに暗転）

二 場

舞台説明。同じ日の夕刻。入口とがラスのない
 窓から雨上りの薄陽がさしこんでいる。納屋内部
 の情景は、一場と変りない。舞台ははらく空虚。
 母もと、思ひ切つた表情で登場。

一 景 も と

舞台中央に近い一隅のときと同じ振幅み台に向
 い、黙言、やがて、仕事をはいめる。その手は濡
 りがちである。やがて、手をおき、納屋の藁壁に
 目をやっている。

新作——ほんとなんだ。だけれど、大二君も牧子も
 好き、なんだし……

作造——新作、きいておけ。上村の家になんか、
 こともあるるに……（言葉つまる）おれの眼
 ン玉の黒いところは絶対に敵なんかやらせんぞ。
 一体、何を考えてるんだ、いまの若いもんは。
 新作——だつて、父さん、せりや、よく／＼考え
 てのことなんだ。母さんにも話してただけで

作造——いかん。牧子が今日帰つてくるのは、そ
 の話をしにくるんか。上村の息子と一緒になる
 とは何事だ。汽車なら、もう両面だろう。眠に
 おりたら、こう云つておけ。上村との話をもち
 てくるなら、すぐ荷物を持つてもう一度札幌に
 帰つてしまえと。それだなければ、牧子の敵意は
 胸かせないと。

（煙、良子が父をさがして入ってくる）

三 景

作造 もと 新作
 良子

作造——良子、お前は知つてるのか。え？

良子——牧ちゃんのこと？（疑問の目を耕作に向け

舞台、ようやく暗がりになつていく気配

牧子、登場

二 景 もと 牧子

牧子——あらッ、お母さん。

もと——あ、牧子かい。

牧子——（母の顔に気付く）お母さん。（走り寄つて、

母の膝を抱こうとするが、思ひをおと、もとの端にベタリと坐る）お母

さん。

もと——（しばらくの間、あえ、牧子、あれば、

もう考えをおしてみないかい、

牧子——思ひをおすつたつて……だつて

もと——だからさ……私はね、お前がこれから

やつぱり百姓で今迄どおりなにしていくのが可

哀想な気がして……せつかく街場の嫁にな

つても、楽しくないように習いもの身に付けておえ……

牧子——可哀想だつて……だつて私が自分で考

えて、自分のためや部落のために不幸運なよう

に考えたんだもの。ねえ、大二さんはね……

もと——よく／＼お前考えてなんかいい。両方の家

で、その気になりさえすればなんだけどねえ……

父さんは二十年前のことばゆるすというし、あ

とは上村の方さへ文句なまや……いられけなん
だけど……。それでも、里塚の方に駛べると
ねー。

牧子——いいのよ、お母さん。
もと——いいのよつて、お前……。そんな都会
ふうな綺麗なお云い廻して、ものを考えて、それ
で一生をきめてしまつていい、おかしい。こんなこ
とは、いちど決めてしまえは、それ……。それ
つぎりなんだからね、そりや、お前は都会で、
大二さんに会つて、そして話なんかして、とし
ているノ、なことを考えるのはいい、さ。だけど、
一生のことだよ。一生の、父さんや耕作は男だ
もん。悪いつぎりよく考えてしまえはそれさ
つぱりしたもんだけど……。どうしたつて、
母さんはねえ……。お前が百姓で一生苦勞する
のが可哀想な死かして。

牧子——そればね、お母さん、有難いわ。心配し
てくれるのは。だけどね、やつぱり、幸福にし
ても存んにしても、自分で決めて、そして自分
のため、部落のためにもなるうつていうのが、
いちばんいいんじゃないや。

とに生田斐が返るといふもんだ。

(間)

もと——牧子、大二さんは、平当にお前を好きで
んかい。

牧子——(羞らうて)……うん……。

もと——ほんとかなんだね、え、？ (牧子うなづく)

そうかい、お前のことが好きなんだね……。

(もと、うなづくように、息をするように……)

兄、耕作、ランブを戻けて登場

三 鼎 もと、耕作、牧子

耕作——あ、二人ともこんなとこに……。なん

だい……。二人して灯もともさすに……。 (提灯を
置いて坐す) なあ、母さん、父さんもあ、云うん

だし、二人もいゝとなりや、こんな話ば源多に

ない。好き好きで一緒になつて……。こりや、

い、ことなんだ。そして……。

もと——そして？

耕作——そして二十年間の和耕も、いつべんに

出てきてさ……。なあ牧子。

もと——お前は、なにかい……。酒でも飲んで

るんかい。

懇親会の人達も、みんなよろこんでくれるんだ

い……。上村さんとも親戚になつて……。父

さんなんか、もうすつかり、親類同志になつた

氣で、かえつて晴れはれしてゐるんだもの……。

お母さん、許しておくれよ、ね。それに、私は

やつぱり……。夜や薄荷やビートの葉なんがみて

……。そりや都会にいるよりはすつと……。辛

けど、仍いて、健康で生き……。と、實際の百姓

になつて生活してたいの。札幌にいたときは

ね、時たま却外に出て、鼠の匂いとかぐと、ほ

んとに隣しい、幸福な氣がして……。ねえ、お母

さん。私達、百姓していくには準備があるのよ

もと——だからね、牧子、そんな都会ふうな氣持

……。お前、なんだかすつかり街場の空氣を身

につけてきたんだね。大二さんも同じかい。だ

から……。そんな都会ふうな氣持や準備だけ

で……。の、かい。大丈夫なのかい。

牧子——大丈夫よ。手の節ぶくれ、少しなくなつ

ちやつたけど、私は体正功かしてゐる方が健康

だし、これから農村だつて、いろく……。朝空し

ていかなさ。やならぬいんですもの……。ほん

耕作——あ、父さんと、前説いに一寸な。父さ

んは、もうその氣でゐるんだし、牧子もすつか

り決めたといふんで、安心して……。なあ、

母さん、牧子のためなんだもん……。

もと——なんだね……。明というものはすぐもう

……。 (提灯を手に取つて……)

耕作——のんきなで……。なあ牧子

牧子——ああ、お母さん。大二さんどこから、家

も隣りだし、毎日、野良で願も合はれもする

んだし……。夜だつてね……。 (涙ぐむ)

もと——ほんとにねえ、お前達ば……。 (これも涙ぐむ)

良子の声——耕作さん、耕作さん。一寸来て。

お父さん水……。お父さんの容子が……。

どこにゐるの、お母さん。耕作さん……。

(驚く、うなづく……)

耕作——なに？ 父さんが……。な、母さん。父

さんが……。 (もとを促して、急ぎ足で入口を立つてゆく、

牧子は坐り込み、じつと涙の出る目でランブの火を見つめてゐる)

父の声——なに、こんなことくらい、なに一寸酒

で酔つたやうで……。しはらく口にせんもん

だから……。牧子は亡こかいな。ハハ……。二

人してさぞお祝ひしてしもうてな。もと、少

しは、うれしい顔をせんかいた、女に、そんな
に心配どうな顔せんでも、俺が万幸、い、よう
にしてやるわい、まだ、鏡はな、……、数字は
あ、納屋か、ハハハ、……、戻しけんじやろう、
ハハハ、……、

（父、つゞいて母登場）

四
愛

作造，
也，
叙子。

作造——ハ、……、左にかいた、牧子、そんな
閑な顔をして。それ、父さんなんかもうすつ
かりい、健康だ。決められたよ。い、ようにな
これからは、……、みんな若いもんが、考えたり
話ししたりして、やっつけていくんだ。い、ことだと
も、……、い、ことだ、い、ことだ。さあ、どん
なので、……、せんで、さあ、い、こゝろ、い、こゝろ、良子
が浮腫を作つてゐるんだから。……、さあ、これ
から大ニ君にもきてもらつて、婚礼の話もせに
やならんし。さあ、牧子、へ作造は熱いづいて
自分の不如斯な体忘れて、牧子をふつて、
連れていこうとする。

良子の声——お父さん。

「腰子め市てて登陽」

五景 作造、もと、敗子、敗子

辰子——お父さん、山崎さんの小父さんか、え、一寸話があるつて……

作造——山崎が。うん、こりや、いゝとこに来てくれなわい。願つてもないことだ。なに……牧子……ぞうだつたな、山崎は勉強会の指導の方の……うん、これはいゝとこにきてくれた。万あ、もと、謀約は山崎に決めたよ、こりやいゝ。万あ牧子、いゝだろうが。

敏子「え、ほんとに……お母さん」

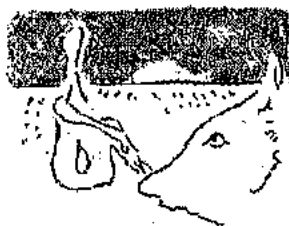
作差——ハハ……親と子にもん、そんなお解願
せんでも……存あ、お加も、ずいぶん都会の
うになつたしんだ存あ。さあ、いこう、いこう。
こりやめめでたいことだ。なあ、もと、いこう
山崎に話さなや……うむ、これで一安心とい
うもんだ。

父よるけ每がら切でいこうとする。敏子は素早くかけよつて、体を抱くように口口に抱える。

もしも不安な面持で弟を追つたが、ひきかへしてきてランジに向う。じいつと眼を注いでいる。やがて遠く滑した如く、ヨシづを揺けると、おしろとどきどきと剣道場とにする。舞台空虚。懐い汽笛の音——幕——

春日

遅々



人物

源作(五五歳)

しのへ五十歳し

正一（二五歳）

現代（二）

五二歳

—その他—

現代の春

所
果北のふる里村

（書代　外出額にモノペをけいて元銀よく左手の戸口から入つてくる）

君代——今、歸つたゞ（下駄をぬぎ居間へ上つて立つ）

澤作——（ぶつきら棒に）遅かつたでねえか。

君代「……でも、お父ちゃん……料理講習会が」

尋常く——平凡な娯楽、正座の居間に炉火仕

切つてあり自在釣に縄石とか、つてゐる。居
面に古めかしい戸棚、電灯が下つており、作
業衣など柱にかゝり正面から左手にかけて広
い土間、農具など適当に配置されている。右
手の奥は明るい戸外に通ずる網けたまゝの裏
戸、居間に繞りて台所がある。――源作、炉
端に足を踏まい紙片の文字などくどくど読ん
でゐる。しの、焚火などくべてゐる――。

源作一君代は、どこへ行つたべ

しの——學校き行くつて、朝が死出したまゝまで

源作——ん？……何でや

し、の――（渡作の顔をチラッと見て）何とか補習会あつ

たとかで。

一、
二、
三、
四、

（舊代） 外出者にモンペをばいて元銀よく左手の戸口が

ら入つてくるし

君代——今、歸つたゞ（下駄をぬぎ居間へ上つて立つ）

澤作——（ぶつぎら像に）遅かつたでねえか。

君代「……でも、お父ちゃん……料理講習会が」

「えれえ喉とつて、」

源作——（沈黙）

しの——（源作に気がつくと）「源代……どう時間か、んねえつていつたが……それに今どきまどか、るつてねえなもな。」

源代——（しのにうなづく）

源作——（ほつりと）「講習会だつつか……何だかお父つちやには合致しな……細仕事ばかりつきりしねえで——遊びくまつてい、だか。」

源代——「遊んで居んかいねえ、今日、学校さ……生活改良普及局の矢島さん見えて、農村生活改善会だつて講習会つてもめやつてくれたい……あら、うんといろく、な料理講習つて来たよ。」

源作——「講習会だ、何だつて……金さばかりかけることやそこねえか、細の手もかりてい使せわしい時によ（煙管を出してタバコを吸う）」

源代——（へ不見義に）「悪かつたか……あら、行つたよ。」

源作——（源代につよく）「うむ、」

（源代、風呂敷から果物の入った白い紙を）

しつてける）

源代——「免つ子……あら、栄養料理講習つていけるけどもな……お前ほどたことあつても食つたりしねえだ……安心してける、おら、お前つとことつても可愛いだよ……今日、先生はな、栄養料理してヤキトリを作るのはなか、」

「免つてよろしうございます。——つていつたけど、おら、いやだよ（免を土間に置く、免は）

「……はねる、うつかんて隙にのせる）……お父つちや……でも……なんして、あ、誤か分かんねえかな（や、誇張した句調で）農村にふさわしい合理的な食生活の改善……商業栄養料理……どうしてそれをやるのが、お父つちやはいけわいつていうだや……（淋しく悲観顔になる）」

（右手の農戸からぞつと、もんぺ姿のまさが入ってくる。源代の姿をじつと見つめる、やがて、二、三歩放したるに近づき立ち止つてうつむく）

源代——「まさを見付けてビックリして立上る、」

取り出すが、フと思い直して、そのまゝ、桐の方へ行つて、そつと置く。）」

しの——源代……何、作つて来たよ？

源代——「いろんなもの……皆んなに食べさせてやるべと想つてドウナリ作つて持つてきた……」

そだねえ……」

源作——（上よつて）「やれ、此れいこんだ……仕事でもおつ始めることにすべえ……（土間におり敷を持つて左手の戸口の方へ出て行く）」

源作の声——（突然戸外から大きく叫ぶ）「免つ子、出ているんだぞう……免つ子、逃げてるだめ！……しの、源代嬢ち、しく上向きかけあり戸外の方へ駆け出て行く）

——間——

（源代、免を手に抱いて正面の戸口から解かに引返して入つて来る——脱も居ない正面の土間のところを歩み足跡を客へ向つて庭面に残るおろす、や、しばらく中庭の穴の毛並など愛撫）

あれ……隣のまさちゃんでいいか？

まさ——（顔をあげ、源代を見つめたまゝ、お辞儀をする）

源代——「あ、びつくりした……おや、誰かと想つたよ……まさちゃん、さあ、立つてねえでそこを待たせたい、ベネに。」

（まさ、黙つて歩き出し炉端を挟んで源代とは反対に右手寄りの庭向に正面を向いて腰を下す）

源代——（まさの方を向いて）「まさちゃん……ホラ」

この免つ子、可愛いやな……」

まさ——（うなづく）

源代——「まさちゃん、何黙つているだよ……姿な人……お前は……」

まさ——（ほつんと）「源代ちゃん、おら……この村さ、居ねいなるだ。」

源代——「居ねいくはなだつて……免つ子さ行くつうだか？」

まさ——（黙つて首を振る）

源代——「んねえは……どうして居ねいくはなだよ、まさ——街と行く」

(18)

君代——何さ？
まさ——（うなづく）
君代——（ある階に打たれる）街を行くつて、本当か？

まさ——（コックリうなづく、悲しそう）

君代——何きに？

まさ——んだ……

君代——何きつて、どんな仕事だよ、

まさ——君代ちゃん、あら、本当は、街さ何きに行くの……いやなんだよ

君代——いやだつて……まさちゃん……好きで街さ行くでねえのか？

まさ——（黙つてうなづく）

君代——（いぶかし）さんだら、何も街さ行くことばえでねえかよ……まさちゃん

まさ——（しんみりと）ほんとうに……あら、街さ何きになんか好きでねえども

君代——んだらハッキリこの村さ誰だら、べにまさ——（涙くあえこむ）

君代——行きたくねえなら……あらと一箱にいつまでも村に暮らしたい、と思ふだよ……まさちゃん

やん

まさ——（思ひ切つて）君代ちゃん……あら……やっぱし街さ行かねはなんねども

君代——（キッとあつて）どうして？ まさちゃん、の気持ち、おらに分んねいよ……

まさ——……あら、ずいぶん嫌だつていつたけんど、お父つちやばどうしても街さ行つて何けつて……な、おら、お父つちやの気持ちも分るだよ……

……あらうち、貧乏だし……兄ちやと娘さんと婆ちや亡子供と九人も家族居るだから……

……そんで兄ちやも嫌さんも黙つてるけんどお父つちやば工場さ何けつて……

君代——工場つて、どこの工場だよ

まさ——藤川製作所……でこの裏だつて……

君代——（へつよく）工場の本なの？

まさ——そうよ……どこの女中さんよ

君代——それで……それで誰かの世話だつていふの？

まさ——お父つちやのどこへ用事来る人ではない、総算のころ、お米や野菜なんか随分はこんで行つた人だつて……

君代——工場の裏なら……向違ひはねえと思ふけれど……やつぱし行つてみねえことにはな、まさちゃん、（不意に）

まさ——あら、何も分つていねえだよ、そんなどこへ行つてい、か思ひか知らねえだ、でも、

家のこと考へると行かねばなんねと思つていのだよ

君代——（しんみりと悲しげに）まさちゃん……この村はお光ちゃんも房ちゃんもどつくに東京さ行つたでねえか……田んぼの火田みだいに夜のあかり照つて、夢中で飛んでいつてしもうたよ……

……みんな

まさ——君代ちゃん……あら……なんだが……今になつて都会さ行つた人程な、幸せなんだが分んねえども、だ……れも何りさねえしな……それにいるんないけすかねえ噂もあつて……あら

も街さ行くの気が引けて……みんなに清まねえと思つてるだよ

君代——まさちゃん、のせいでねえどもなあ、

まさ——（はげしく）あ……あら……分んなくなつちやうた……（両手で顔を覆ふ）

(19)

やん

君代——まさちゃんとは、子供んどきから木の仲良しだつたよ……それが別れるなんて……お前が嫌つてさ行くなら本当に嫌だけん……

うでねえしな……それだ、おらうちの兄ちや死つてなんぼかづかりするべ……

まさ——（深くうなづかる）

君代——（史を抱いたまゝ立上る）まさちゃん……寸待つて……お兄ちゃんも畑さ行つて呼んでくるよ

まさ——（機をあげて悲鳴に）君代ちゃん！

君代——な、まさちゃん、兄ちやに会つてくんろ（土間を駆けだし戸口で宛箱に兄を押し込めるように入れ

る、それからまさの方を振り返つてうよく）まさちゃん！ 待つて……（戸外へ駆け去る）

（まさ、むじもじして立つたり腰をおろしたりして、立上つて土間を二歩行つたり戻りたりする、手の届く扉の柱に正一の襦子が掛けてあるのを睨つける、それをせつと取つて顔にのせてみる、なつかしさに切なそう、戸口の方に入の気配がするので慌てて居間に正一の襦子

を置いて急いで元の位置へかえり戻す。そして神妙に構える。――正一、手拭で顔をふき、入つて来る。作業場である。まさちが居るので止どまる。まさちはすつかり固くなつてうつむいてゐる。

正一――（思ひ切つて）まさちちゃん……今しがた君代

が煙さ呼びに来たもんで……

まさ――（驚き）

正一――街を初めに往くつて本当だか？

まさ――（尋くさず）

正一――どうして街を往く氣になつた？……ま

さちちゃん、街を往くなんて、おらまつたく反知だあ。

まさ――正一ちゃん、おら、行きたくねえのし

正一――「つよく」だつたら、行くのあくまで止めたりい、だ。

まさ――（涙い散見）……でも、やつぱし行かねはなんねえし。

正一――（吐き出すように）何て、氣の強い話だ、

まさ――（立ち上つて、すまなげに）まさちちゃん……元氣でな……（去らうとする）

た運物をやり出す。……昔いものが村を隔れて行つてしまふだからなあ……この村の父やだちも、おんまり分るわいだ。

まさ――（はげしく）何しわんで、何も……

正一――（まさちと遇つて）まさちちゃん、

（まさち、熱しく顔を覗き見て泣き、手拭を土間にふり蒔き足踏、腰戸から駆け出る。正一は放心したように屈曲に仰向けに倒れる。顔に涙を流し声を立てずに泣く……）

—— 幕 閉 ——

—— 向 ——

宵の場——煤けた電灯が一つ打つてゐる。煙のあがる炉端を取りかこんで源作、しの、正一、君代、黙々と夕飯を取つてゐる。源作、茶碗をしのに出す。しの飯を盛つて返す。君代、正一の方に手を出してゐるがすが正一首をふつて茶碗を置く。——何かひびく海えこんでいる風、それに気がついてゐる君代の背持も重く……

正一――（押しかきさるように）まさちちゃん……どうして、街を往くのか……自分で往きたくねえものさ、行つて煙屋にいわれて、そのまゝ行くだあか……まさちちゃん……

まさ――（両手で顔を覆ひ泣く）

正一――（二三歩まさちの方へ）街で女中仲先に何くだなんて……そのあと、どうなるか分つてゐるだ……酌婦、パンスケ、（悲鳴に）おら、思つてもたまらねえだ……まさちちゃん、そなたの落ち目になるなんて……どだことさしたくね……そだこと……（興奮して）おらあすのど、前から……まさちちゃんがすきでいた……

まさ――（恥かしげに身をくねらす、内たうれしそう）

正一――（一層激しい感情で）……しかし、おら、好きだなんて……もう駄目だあ……今となつては何もかも遅い思ふなあ（しんみりとおら、実は、この場まさちちゃんや君代たち、みんなだのしく共同で内けるようなことを真剣に考へていた……君代も真剣に涙み余の乗りながら話をもちかけてゐるつうだ……例へば公儀師さ……シン備えつてみんなで内けるよな……）と

しの――（が端の正一に）お湯……ついでける、正

一。

正一――（それに応答する考えこんでゐる）

源作――（ハッとして）お湯けるつうだめ、正

一。

（依然、正一が去入こんでゐるので源作ジロリと正一を見てから、しのに湯をくんでやる。それから源作煙管を取り出し煙草を吸う）

正一――（キッと顔をあげ源作に）父つつあ、願ひご

と、おら、あんだ。

源作――ん？願ひごつて……何だ。

正一――おら、百練つてものな……昔のまんま

やつてたら、だんくどうにもならなくなるのてことハツキリ分つて来ただ……それで願ひごとあんだが……

源作――言つてゐる、正一。

正一――おら、めん羊は買ふことにした。

源作――ん？めん羊だと？

正一――（うなずいて）ほだ。

源作――（つよく）おら……しかしこの父つ

「お前、めん羊は賣ることにし、足つて誰の計し得て、決め足つうだ。」

正一——（沈黙）

源作——めん羊一頭買つたつうでどうもなる。めい、せだ高い金出して何ぞ利益になるつうだ。

正一——利益になつから買つたあ。

源作——ならねえ、初角買込んで殺して、もみろ

元も子も益なしつうもんだ。

君代——（源作に）お父つちや……めん羊飼いは羊をどれるだ、肥料もたんと、とれつやだよ。

源作——お前は黙つていろ……お前らは何だかだつ、つうと親に反対しくさる。父つちあはな、獄一本で今日まで叩きあげてきた百姓様だ。この獄一丁で大抵のもんは儲けて果だつうも、だ、おらの鉄つかいは誰にも勝はとうせぬ。い、い、い等は何も知んねえどもなあ、（源作を）

へしの、勝など台所へ運びはじめるが、不安な気配りである。）

源作——（越つてくる）君代、お前もお前だ……

しん、街さ行くつて本当かや？

君代——（黙つてうなづく）

しん——まさちやんがなあ……ついで、そだ話聞いてねいども……それに文中奉公だつてか……

そんでは、まあ心配もんだ……あんな無頼な女ごかあ。

君代——（しんのつかるように）な、母ちや……ま

さちやんは行きたくねえつて……今日も泣いていた。

（正一、ふと立って土庫の方へ歩き腰を落ろして着えこむ。）

しん——行きたくねいつて？

君代——まさちやんの父つちやがどうしても行けつて……九人もの家族だから娘つちの道具なんか作つてやれねい、お前ひとりで後いで作れつて……

しん——（同情して）で、無理いつてな……君代——それで……土庫の寮の女中さんつていつてな……世話する人あつて……

今日、あらに何といわれた。……お前、戻した

……に……

勝手に金かゝる賭博会を出かけたでねえか、少しは畑の手入れしてみろ……金かゝる真似はつかりしくさつて……正一、お前もめん羊だなんて誰の財

布からその金出るだあ……（源作をつよめて）父つちあは承知しねいど！

正一——（苦痛に首を垂れている）

君代——（ある度度を見える）お父つちやは、何でも頭からどやすだよ……お父つちやはおら達若いもんが、どうしたら、これからい、暮らしやれつかつて……それに、この貧乏村を明るくするつて……一生懸命考えてやつてんのに……頭つかう要けつねえだよ……（悲しく）房ちやんだつておさ行つてしまつた、今度は臨りのまさちやんまで、街さ文中にやられたつていんだ……お父つちや達に分ねいから、みんなおらの友達この村離れて行つてもうだよ。

源作——（沈黙）

しん——（一箇方どこへ坐つて）君代、まさちや

しん——（一箇方どこへ坐つて）源代、まさちや

えもんだ……可愛いぞうに。

正一——（やけに叫ぶ）みんな若い女ごは街さ売られていけは、だ（其上つて裏戸の方へ歩きながら）と、（悲しく）みんな若い女ごはこの村から出てこれ……（虚無的な笑ひをのこし戸へ去る）

——や、聞——

源作——（しんが）君代……臨りのおまさは、本当に行きたくねいつて泣いていたか？

君代——（うなづいて）うん。

源作——（切々たる聲で）……でも……可愛さうに……何とかしてやんなくちやなんめいな。

しん——（力を盡して）な、父つちや、まさちやんは君代と子供のとときから大の仲良しで……い、手だに……役場とか、組合とかに何とか勤めさせ、こと出来ねいのかしなあ……

源作——おまの親父も頑固、敵な男だ……

君代——（つかつかつて）お父ちやみたいに……

源作——（つかつかつて）お父ちやみたいに……

源代——お父つちや、あら……今日、料理講習会

「さ行つたこと、お父つちやに黙つて行つて悪かつたぞ……」そんな、い、詰り合はつた。お金かけねえでうまい栄養菓子作れたよ……」

源作——「や、肝解けて、何作つたか知んねえけど……まあ、父つちあも本当は、どう、むけに反対してねえなあ。」

しの——「（笑つて）現金だ、お父つちやの給つては……アハハ……」

（源代、明るい気持になつて五上り戸棚の上に置いてあつた新色みの菓子をもつてくる）

源代——「ほら、お父つちや、あら、先つぎ怒られたぞ、この作つたドウナリ出せぬいで戸棚にめすけていたよ……」

（給包みをあける）

しの——「トウナスだつて？……」 源代。

源作——「ん？……トウナスつては野菜だよ。」

源代——「（笑つて）いやだ、あら……さだこといつて……ドウナリつてお菓子だよ。」

源作——「うむ、（どうなる）」

源代——「（フト真面目になる）あら……まさちやんのことね……とりても可哀想で仕方ねえだよ……」（はつきりという）まさちやんはおらの兄ちやねとつても好きなんだよ……」

しの——「（おどろく）え？ 正一を？」

源代——「（うなずいて）んだとも……兄ちやだつてまさちやん好きで好きでねえねいのだよ……」

あら、前から、ちやーんと知つてる……」

しの——「（つよく）二人が、ど仲だつて……」

源作——「（おどろいて）……する……正一とまさちや……」

源代——「（うなずいて）ん……でも……さう大した深い仲ではねい……間違いはねいけんどもな……」

しの——「（うなずいて）たゞ……好きだつちや仲だべ……」

源代——「（再びうなずく）」

源作——「さだ仲なら……何もかくしてることなか……」

ん？……源代の子に飲しつうたら貰つてもやるべしに……「せいも言えねえで……めん羊殺したなんて正一のやつ、何ぬかしているぞ。」

源代——「麥つ粉に卵に、菜油……それだ……」手に作れるだよ……お金かけぬいで……」

源作——「（驚く）お父つちやをスポンでさつて……」

食つてみべいか。（ムシヤ）……食べる……」

をかしけて考える……うまさには驚かす……思ひだしたように又ムシヤ……（食ひる）

しの——「（食ひながらドウナリを割つて中味を細々たりする）……うめいもんだよ……ドウナリつて……」

源作——「ほんとだ……あら、初めてこんな……うめい味知つた……いまいつけるや（源代の方に大きな手を出す）」

源代——「現金だなあ……お父つちやは……（ドウナリを半分に分けて父に差し出す、源作もまそろに食べる）……お父ちや、料理講習会さ、行つてもいい、ほなあ？」

源作——「うん……（つよく）行つてもいい、まさちやでけるや……ドウナリ……（笑つ）アハハ……」

しの——「（おどろく）やれ、やれ……みんなに焼つていた……な、やれ……」

（懐き番向きの愛嬌が湧いてきている）

源代——「お父つちやは、まさちやだつてさだか……」

源作——「い、や、おら、焼つてなんかいねい……ハッキリしねいつうだけのもんだ。」

（正一、正面の戸口からシヨンボリ土間へ入つてくる、まるで放屁したようにだらしない身だしなみで顔は蒼白である……やがて正面の居間に力なくがくりと腰をおろす）

——「この間、正一だけにスボリトライトを向ける……」

しの——「あ、正一……どこさ行つてた……」

正一——「（夢遊病者のように無言）」

源代——「（不安に）兄ちや（正一をじつと見つめて）……」

——「や、面……」

源作——「（上つて）……あら、さうくから出かけてくるぞ。」

しの——「どこさ、出かけるさるつうらだ……お父……」

源作——まさにところの家さな……久し振りで
 ら……あやしと將其してくつ……あいつも
 頑固だあ……こつびどく食がしてやつと存
 しの——お父つちや……今時分なつて將其さし
 行きなさるだかあ……

源作——（しつ）おらあ、こんどは敗けた……若
 いもんには（笑う）アハハ……ついでにま
 空嫁つ子にけつて頼んでみてくつ……
 源代——（大さく胸打たれて）あ……お父つちや……
 源作——（し）た、い、ま（源代に）なめ、源代……
 ドウナリ就つてたら正一にもやれや……（土間
 へあり奥戸の方へゆつくり歩いて行く）
 正一——（次々に生氣を取戻す、暴動をかくし切
 れず腕で眼をこすりあける）

（奥戸の方は月かり床り初めだので訪る。重
 色に明るく輝いている——軒下を通りすぎ
 る農夫のゆつくりした胸をが窺い出す）

「ハ——、おらが出るばさ」

ま
 こ
 こ
 ろ

（一 幕）

人物

俊子 競争未亡人
 さち子 亡夫の妹
 清二 亡夫の弟
 良三 亡夫の弟
 たきの 亡夫の母
 みつ子 さち子の友人
 幸作 亡夫の叔父
 多吉 街江田員
 康二 全
 太平 村人

他に郵便配達夫

時 秋に近い晩

所 農村

舞台 上手は塙えぬが、出入口の土間になつてい
 る心・正面は座敷——半前は、広い縁側く
 両戸が立て、ある、下手から奥にかけて通
 路——すて、中腰又は、それ以上の腰が

寫さかたまつた

ホーイ、ホーイ

山サお月さが出て飛んだ

ホーイ、ホーイ

（註、その土地の情緒ゆゑを、地味を民謡なら何んで
 もよい）

（唄声フット止む）

農天の声——（戸外で）お晩方でやした

源作の声——（同じく）あ、いま帰るだかあ……

まめに切ぎやすのう——（一段と声を張つて）

あ、今夜もい、お月様だめ——（明日も、さ
 つとい、お天気になりやすべ——）

正一、立上つて懸せられるふるに二、三步日明
 の奥戸の方へ歩き、立ちどまつて前方を凝視す
 る——

しの、源代にもに屈向に坐つてま、これも奥戸
 の方を消のびするふに兎入つてける——

——静かに幕——

のめしうい過当に——

午江い境、奥で山羊のなき声——

宿幕、村人、太平登場——

太平、ごめん——ごめん、チヨッ！（留守と知つ
 て舌打ちしそれから退場せんとして、急ぎ足で登場
 の俊子と顔を合す）

俊子、あら、御用でしたの？

太平、あ、今、晝あかりかね、これ……人と、紙地
 を渡す）

俊子（受取つて）御苦勞様です

太平、はい、ではごめん（退場）

俊子、ちよつと紙地に目を通して懷中に入れ、上
 手に退場、直に座敷へ現われて両戸を開ける、そ
 れから又、奥へ姿を消す

さち子登場

さち子、あ、い、ど、こいしよう（と大がさに言つて
 縁側に腰を下し、奥に向つて）姉さん、俊子姉さ
 ん、姿も帰つて来たわ、

俊子 はい、さち子さん？へ出て来る。

さち子 太平さんが来たでしよう？

俊子 え、これへ紙幣を出す。

さち子 へ愛取って。何？お客へ薬を……二

時から……又、お祭の相談が、やれく、あ、

おまかせいたし、何か願戴、俊子姉さん、

俊子 もう、おひるさんだけと……じや、特別

ね、へと奥へ服に行くと。

さち子 へ笑いながら、しや、手を洗って来よう。へ

と上手奥へ退場、趣向に笑って又、縁側に腰かけ

る。

俊子 はい、少ししへと紙幣を造して退場す

る。

さち子 有難うな、姉さんの、お手製のビスケッ

ト、ほんとにおいしいわ。

俊子 へ笑いながら、そう、嬉しいわ。

さち子 こ、へいっしやらない、おひるの支度な

う未だ、わ、髪、手伝うから。

俊子 へ出て来く、え、もうい、のよ。

さち子 今日はずいぶん暑いな、町へ行かな

い？

俊子 町へ？

さち子 へ笑い出す。まア、姉さんのあの髪、町へ

行つて映画でも鑑て来ましようよ。

俊子 まあ、さちちゃん！

さち子 だめく、俊子姉さん、髪は未亡人でござ

います、でしよう？

俊子 さちちゃん、だつて髪……

さち子 へ睨んで、まア、お姉さんのことを干渉する

ようだけれど、さち子の氣持わかる？

俊子 え、有難う、わかつてるわ。

さち子 だつたら、おつと元氣を出してよ、結婚の

年に、清兄さんが病死された時は、未だ、あつた小

さかつたけれど、もうあれから八年……俊子姉さ

んが未亡人になつた年と同じ年頃になつたのよ、

多少は大人っぽくもつたつもりなの、それでね

お姉さんの生き方について、つくく考えさし

られるのだけれど。

俊子 戦後で東京の家は焼かれるし、両親も一時に

失つたり、それに……へ涙ぐむ。

さち子 お前の母はね、兄さんとは結構僅かに一軍

と二軍の間……東京の女子校まで出た俊子姉さ

んが、こんな田舎でくすぶつて、お姉さんや、私

のような小姑に、嫌な顔いさせられて……

俊子 さちちゃん！

さち子 わたし、皮肉や、ひかみを言つてるんじや

はいのよへと明るく笑みかける。

俊子 わかつています。さちちゃん、あなたの優し

い氣持、あたし、よくわかつてるの。

さち子 嬉しいわ、元氣を出してね、いまにきつと

い、ことあるわ、あ、それからね、又、清二兄さ

んとの両婚の結が飛出してることも知ってるのよ

……苦しむことなんかないわ、要に妥協しては

駄目よ、清二兄さんだつて……へと、言いかけて

……あ、母さん達、帰つて来たわ、又あとでね。

俊子は高いて、目薬を拭き、奥へ退場する。

母さちの、と清二が登場——やかんほど持

っている。

母 さち子、お前、いつの間に戻つたの？

さち子 愛嬌が、い、子じやない？へと、おどけて言

う。

母、苦笑しながら奥へ——

清二 やかんぐつて持つて帰るもんだよ。

さち子 へい、その代り、おひるの支度がして

あります。

清二 それは、俊子姉さんの言うことだよ！

さち子 へ笑つて、あ、……女はつまらない、愛

事に家事に、労働過重だわ。

清二 だつて、さち子には、その資格なし。

さち子 へ笑いながら、そう、おひるから、腹減りてこ

ごんすから、お客へ行つて、お祭の相談ぶつて来

るとい、わ。

清二 何か言つて来そのか？

（さち子紙幣を出す。）

さち子 定刻二時か三時になり……そして又お湯を

呑む、というところまでわし、ようす……へ可笑

しみをこめて言う。

清二 へ紙幣を懐中に入れ、バカげたことだ、金く

時間通りに来るという事は、はいんだからな。

さち子 麻になるわ、一時間や二時間遅れるのは、皆

り前みたいわ、素直に酒はつぎものだし……その

お酒だつて結局は、みんな各戸に割当て、何と

か費用とかいう名目で取られるんでしよう。

清二 そうなんだよ。

さち子 改善する事だらけだわ。

と、バスケットを又、口に入れる。

清二 何を咄めているんだい？

さち子 咄めてるじやないわ、バスケットよ、俊子

布さんから持来り。

清二 へ、黙って手を出す。

さち子 へ、二つ三つ渡し下らうべし、幸作叔父

の話、兄さんのKじやないでしようね。

清二 勿論さ。

さち子 お母さん？

清二 お母さんは、どうも道、叔父さん任せにけれ

と、お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お

くまでも、お父さん、お兄さん、お姉さん、お

又、お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お

よ、お母さんは、お父さん、お兄さん、お姉さん、お

さち子 そうですね、へと、お母さん、お父さん、お

母の、お父さん、お兄さん、お姉さん、お

清二 はい、お母さん、お父さん、お兄さん、お

さち子 お母さん、お父さん、お兄さん、お

清二 はい、お母さん、お父さん、お兄さん、お

さち子 お母さん、お父さん、お兄さん、お

清二 はい、お母さん、お父さん、お兄さん、お

さち子 お母さん、お父さん、お兄さん、お

清二 はい、お母さん、お父さん、お兄さん、お

さち子 お母さん、お父さん、お兄さん、お

清二 はい、お母さん、お父さん、お兄さん、お

さち子 お母さん、お父さん、お兄さん、お

清二 はい、お母さん、お父さん、お兄さん、お

さち子 お母さん、お父さん、お兄さん、お

清二 はい、お母さん、お父さん、お兄さん、お

さち子 お母さん、お父さん、お兄さん、お

叔父の幸作が登場。

幸作 ひるはすんだかすへと、さち子の後から呼び

かける。

さち子 へ、振りかえつて、いらつしやい。

あ、これは、これからよ、お母さん、叔父さんよ、

(と奥へ呼びかける)

さち子と入道ひに、さち子の出て来る。

母 い、つしやい。

幸作 昨夜は御馳走！ 今日、お母さん、お父さん、お

て来たか、さち子、お母さん、お父さん、お

を、つけたか、さち子、お母さん、お父さん、お

母、それ、お母さん、お父さん、お

幸作 何だね、お母さん、お父さん、お

や、お母さん、お父さん、お

俊子 いらつしやいませ。

幸作 今日、お母さん、お父さん、お

た、お母さん、お父さん、お

俊子に、お母さん、お父さん、お

幸作、お母さん、お父さん、お

ろ、お母さん、お父さん、お

う、お母さん、お父さん、お

さち子、お母さん、お父さん、お

幸作、お母さん、お父さん、お

さち子、お母さん、お父さん、お

清二、お母さん、お父さん、お

俊子、お母さん、お父さん、お

母　　「そうか。――ちよつと、わしはやすひかな。
　　（と腰を上げる）」

修子、それがよろしいですね。

さち子、お姉さんと、さち子は映画館に行こうかな。

俊子、腹で押える。さち子は首をすくめて
舌を出して要せる。奥に行こうとする前に
は、ハンギリそれが聞えない。

母、何かの？

さち子、(早口で) 何でもないので、それくお

母さんの腹が曲っている。うんと仰してもうと、
後にそり返って、

母、ひょうさん、まだいへと、さち子、(遠慮)

さち子、あ、思い出した。山羊が啼くと、お姉さん

のビスケットが食べたくなる。わえ、おねが
い。へと腹蔵の真似をして俊子に甘える。

俊子は、それにつられて、ビスケットの皿
をそのまゝ出す。と世へ、さち子の愛定
のみつ子が入って来る。みつ子は清二に好
意を寄せている。

みつ子、今日は、

さち子、あり、みつちゃん、いっっしやい。

俊子、今日は、

みつ子、あの、これ、お姉さんに借りた聖紙

を出す。有難うございました。へと新聞包みの聖紙を
出した。

俊子、いいえ、どう致しまして。お役に立ちま
したか。

みつ子、はい、あのわたしに丁度よくて好かつたん
です。

俊子、そう、そりやよろしうございましたね。

さち子、お茶までに出来る？

みつ子、え、へと軽く笑つて、あの、お姉さんに又
婦人会と青年団共同の修養会で講習会をして聞い
たいつてことを、わたし、確かめに今日は来たんだ
けれど。

さち子、そう、そうだったわね、俊子姉さん

い、でしよう。お聴いしますわ。

俊子、おで出来ることさう、お役に立て、要します
けれど。

さち子、お姉様は、洋裁の先生で立って行けるんだ
からいいわ。ところが、みつちゃん、このビ
スケットは、山羊の乳入りよ、食べとごらんよさ

いたわ、そこ人又はハッキリしてゐるわ。

みつ子、清二さんと、姉さんとか一緒にいるのは当
然だつて誰でも言うわ。

さち子、本人の意思でもないものを結び合わせるの
は封建的よ、封建的をばなれて寄付が甘ひで味、

喝せられて、それで又うまく行つてゐる人もある
けど、清二兄さんや俊子姉さんには、一寸ちが

うのよ、お互いが自由の立場で尊敬し合つてゐる
から、夫婦になる、と宿命的に考えて一つ屋

根の下で暮らしているんじゃないんだもの、清二
兄さんは俊子姉さんをあくまでも僕の愛する清二の
妹として敬愛している、つて一点張りだし、兄さ

んの女性観は、正しくて親もしいわ、みつちゃん
安心していいのよ。

みつ子、え？

さち子、兄さんを信用していらつしやい、兄さん
のために大いに教養をうんで賢い、つて言つて
るのよ。

みつ子、まア、さつちやん、

さち子、兄さんの素直は、どうやらつと、みつ子を
指して、このへんにあるらしい。

さち子、でも清二兄さんとは、ほんとこの姉弟みた

俊子、どうぞ、(俊子は奥へ退場)
みつ子、おいしいわね、俊子姉さんが？
さち子、え、さうよ、い、お姉さんだわ、わたし
何でも思ひついているの。
みつ子、ほうとうの、お姉さんみたいわ。
さち子、さうよ、わたしも一人っきりの娘だし、俊
子姉さんだつて独りっきりだし、
みつ子、独りっきり、おねの番ね。
さち子、両親は面談で亡くなるし、一人、さりの
兄さんはトラップで戦死、家は焼かれるし、そ
して夫、つまり清二兄さんは沖繩で戦死、不幸
な姉さんだわ、でも、子供を抱えて苦労している
人に比べたら、勿体ない、つて言い暮らしてい
るのよ。

みつ子、これかつも、ずつと此家で一生をやるの？
さち子、さアそれはわからないわ、若い未亡人だし、
再婚してはいけないう法もないんだし、へ
ふと、気付いて、どうしてそんなことさくの？

みつ子、どうつてことないかと、

清二 さち子、いいえ、うういそー、その意気な女子が、
軍団の方は、さち子やみつちやんに頑張つて貰つ
て、よく各家運動をやつて貰うんだ、とばかり、
これかうけ言遠のようは、清二と婦人層に期待し
なければ駄目なんだよ。

さち子 あら、運動の時ばかり期待するなんて、
おれ、へとみつ子に云う。

清二 (真面目に) 祈らしい村作り、延いては新
らしい日本再建には、定ず、純粋な青年の精進
と、婦人層の正しい批判と、それに相互の協力が
事に必要だと言ふんだよ。

さち子 わかつてるわ、それを確かのためだよ。
俊子 い、お話ですこと、。

清二 この家に来るとね、お母さんまでが、話を聞
いて、笑れるでしょう、俊、このふん、団気が減し
んだよ。

多吉 金くだね。

清二 お母さん評判がいい、ね。

母 わたしにしたいなものかね (暫く笑う)

さち子 明るい家から、健全な思想が生まれま
す、(と明るく言ふ)

多吉 同感!

俊子、拍手する。一同も和す。

さち子 遠くから良三の笑声↑

良三 喧今、

一同 お帰んなさい。

良三 南校と、一回対一で勝った、今度の日曜に本
試合だよ。

俊子 よかつたわね、はい、(とビスケッ
トを出そうとする)

良三 手を洗つて来るへと足早に行きかけてから、
姉さん、僕の弁当、今日、急に検査があつてね
茶振個を考慮した西バーセントの表題でつて、

清二 有難う、姉さん、

俊子 (感動して下を向く)

清二 成程ねえ、味噌や、梅干一つの弁当じゃあ、

さち子 これは、良三の女性への身分にあらという
わけよ、みつちやんも私もね、

清二 俊姉さんの感化が、すいにて感服しているわ
けさ、

はどう思う?

さち子 勿論、大賛成よ。

母 俊さんは、東京へ来るのかの?

さち子 姉さんの新しい出発よ、わたし、その方
かい、と思つた。

俊子 誓のようで、私としては、君に、どうとも決
められないのですか、

清二 姉さん、僕達、応援しますよ、おやん、

俊子 幸福過ぎて、空想ろしくなりませう、

母 東京へ行つても、こゝを我々だと思つて、い
つとも帰つて下さいよ。

俊子 お母さん、すみません、子供もよい、賢彦
な来亡人で、私のようは、

さち子 お姉さん、みんなそれらの運命なんです
もの、望々と生きて行くのよ。

清二、そのだとも、

さち子 ね、その学校に入れて頂きたい、

清二 よし、それもいい、だろ。

さち子 あら、即決賛成ね、うわ、嬉しい、

清二 独りじや、とても東京へは来れないが、俊姉さ

俊子 マア、そんな
多吉 (清二に) 僕達、失敗しよう。
清二 そつだね。
みつ子 わたしも、
清二 来た、い、でしょう。
さち子 来るべく挨拶あつて三人退場
さち子 清二さん、俊姉さん、東京に行くように
はるのよ。
清二 え、何でつて?
母 どうしてだね。
清二 本道員を定付けた俊子、出て来る。
俊子 は、あの、この手紙、
清二 (笑取つて黙る) なるほど。じゃ、同窓会で
消息がわかつて、洋裁学校の校長から助教師に選
望して来たんだね、俊秀だつたんだね、やつ
ぱり、

俊子 取るに足らぬ私でございますのに、
清二 いや、そんなことはない。この校長は姉さん
の技術を偏しんでいられますよ、姉さんの再起の
ために、い、サヤンヌだ。お母さんや、さち子

んが、ついで、下されば変心だ、

さち子 お母さん一人の又手じや、とても東京へは
出られずいりと、おの入り、ついで、呉れるので
安心だ、

清二 何だ、それは？

さち子 お、み、つ、さん、

清二 こいつ、

一同 快く笑い合う。

貞三 乳をしまるんだよ、

清二 おーい、いま行くよ、

母へ越え上るうとして、あ、痛ッ、ウウ、

俊子 どうしました、へあわて、傍へ寄る、

母 腹がね、（と痛をしかめる）

さち子 お母さん、昔い時からゆきすきと証拠だわ、

まだ、そんな年でもないのに、腰が曲るなんて、

うしろに足いさつてやるのよ、

母 こうかい、あッ痛ッ、

さち子 ぞつてそつて、一ニッ、一ニッ、

快活に笑い下り、手金をかける。

清二 は、朝は町外から来るかしら、の口笛

を吹き下り、さち子の命令に合せて、素直か
つ下り、上手に歩きかける、

俊子 は、母をいたわる態度、

山羊が、のーい、となく、

和やかなふん囲気の中に、

幕

空 梅 雨

幕

人物

- 百姓 徳三
- 其の女房 お民
- 百姓 勘助
- 其の女房 お國
- 其の息子 碓太
- 子守女 チイ
- 行商の青軍
- 女学生三名

時 夏

場所 中国地方の農村

中国地方の田舎の街道に面した百姓家の庭
先、中央から下手に四枚障子の部屋があつ
て、前は縁縁になつてゐる、それより下手
に裏木戸があつて、附近は竹林。

中央より上手は一間程の出入口。そこに新
き出して、休憩所の體にしつらわれてゐる
三尺程の高さにパンの入った陳列箱、その

上に三つばかり、飴やキマラムルの入つた
硝子箱、その左手にラムネの入つた水槽
が一尺程の台の上に置いてある。床几、脚
お刺は風張、それより上手は障木が三三
水、

藤が閉くと、子守女の子イが子を貰うて
あやしている。少しウスノロの感じ。

小鳥の音がしきりにする。

裏木戸をくぐつて女房のお民が、カンナ
及び夏菊を一杯背子で負うて果て縁先は
荷を下ろす。

お民 どつこいしよ、重いのう。チイさん、誰もこ
なんだか？

チイ ん。今背戸の山口のが、パンを三つ買ひに
来ちやつたよ。

お民 そう。父ちゃん、何処かへ行つた？

チイ さあ、今居つあやつたがのウ。

お民 そう。さ、今度わしが店番するけえ、あんた

は夕飯まで遊んで来てもいいよ。
ティ ふん。

（予守下手へ去る。入れ違ひに、女学生二名自転車に乗って来て座席で下りる）

女学生一 先生、只今、

お氏 あら、お帰り。あんた達、毎日遅いんじゃないやね。

（女学生達顔見合せて笑う）

女学生二 え、学校が有んでから、バレーの練習があるのよ。

お氏 ほ、大変じゃね。

女学生一 まあ、きれいなカンナ、先生お花像の、上手なんじゃねえ、これ、今から町へ出すの？

お氏 え、

女学生二 わしやカンナ大好きじゃ。

女学生一 私り、情熱的で……

（又しても女学生笑ひ合う。）

女学生二 わし達、今度のお稽古は何生けるの？

お氏 さあ、このカンナにしようか。

女学生一 カンナ生けるの、何だか難かしそうね。

お氏 そうでもないよ。

お氏 お父ちゃん、何処行つとつたんの？

田園ね？

徳三 うん、田園じゃ。

お氏 うちの田は大丈夫か？

徳三 うん、うちのは大丈夫じゃ。細々ながら水が通つとる。去年無理して工事したお蔭で。だが勘助の田圃やその上の田圃なんか、枯れ気味じゃのう。明日にでも降らんたら、もう、さう青つまいて、実際、こんな降らんことは珍らしいわう。

お氏 ふーん、どうする気じゃろ？

（徳三 煙草を出して返事なし。間）

お氏 うちら工事をしてよかつたの。あれがしてなかつたら、……今頃大変じゃて、花をやつたお蔭で、あの工事の金も出たんじゃ。のう、父ちゃん。

徳三 うん。……（間）

お氏 さ、父ちゃん。荷造り出来たよ。取まで持つて行つてや。

徳三 （不服そうに）お前いかんのか。

お氏 そりやいうともえ、……さうすると遅い

女学生二 あ、暑い。（反響）ラムネのまん？

女学生一 のうや。

お氏 あんた達、無駄使いしちゃ駄目よ、

女学生二 まあ、先生、先生は簡便気ないんだやね。……じゃ一本を二人での中うや。

（笑ひながらお氏はラムネを一本とつて、栓を抜いて渡す）

お氏 今、コップを持って来て上げるけ、待ちんなさいよ。

女学生一 え、ですよ、先生。こうやるんじや。

（大きな口をあけて仰向き、ラムネの口を唇からかなりはなして流し込む、半分程のんで、もう一人に渡す。女学生二もそれをのみ干す）

お氏 （笑つて）まあ、あんた達、お行儀がええねえ。

女学生一 誰も見ちゃ居らんけえ。

（その時、「いや、見とるぞ、見とるぞ」と笑ひながら徳三が出て来る。女学生達は喚声をあげて、「大敗した」とか「先生さぶなら」との云いながら、自転車に乗って逃げさる）

徳三 あはははは、この頃の娘は大したもんじやてえのを。

しが遅そうなるが、ええか。

徳三 そいじや、わしが行つてこう、しかしお前は全く人を牛馬の如く使うわう。

お氏 （くすくす笑う） そのかわり今日は焼酒を賣うといてあげるけんね。

徳三 よし、ほいじや！（と元氣は自転車に花の荷をつけて去る）

お氏 自動車に気をつけて、自動車に逢うたら、そのまゝ通り抜けんと、下りんさいよー（と、うしろから叫ぶ）

（間。）

（お氏は、さて御飯支度を、という風は薪などもつて、戸口を入りかける所へ、下手よりお圃出て来る）

お圃 一寸お氏さん、

お氏 あ、今日は、

お圃 あの、清まんが五百円貸して呉れんの。すぐ返えすけん、明日は返さると思ふんじやが……（間） 相模屋さんに米一斗渡してあるんじやが、明日はさつと金をくれると思ふんじやがのう。

お氏 ふん、一寸待って、（お氏は、線路のそばに
の中まがさく）と捜して、百円札を五枚銀をの
ばし集ら出して来て、お国に渡す。）

お国 清まんろう、醫神買う金がないようになつて
了つて、それに密売料をとりに来たんじや。渡
さんわけにもいかんけえの。渡してしまつたん
じや。すぐ返すけえの。

お氏 え、よね。何時でもええよね。そつちの都合
のえ、時で。

お国 確太の月給も、もう直ぐ入るんじやがね、
お氏 本当に何時でもい、よね。でもめんだの折
も確太さんが勤められたけん。

お国 ほんまに、息をついたよのう。

お氏 市役所とか？

お国 うん、臨時雇いじや、本雇いじやないけん、
つまりやせんよ。長い間ぶら／＼しておつて、
よう／＼入つたんじや。

ほいじやが、やれ靴じやの、ズボンじやのシマ
ツじやの去うてのう、向分のもんばかり買うて
黙つておりや、一袋も家の方へは入れよりやせ
ん。……鬼月は、めんだ、家に入れたのが、た

つたの手印じや、めきれて了うてな。そりやの、
運動の汽車と向、着いてからの電車ですんばか
かるんじや。しかし、なにしろるかばかりやせ
んよ、口だけは一人前じやがのう。

お氏 ほうかねえ。

お国 ほろよ、（向） それに、（喘息をついて）
今年はこの空梅雨じや。

お氏 あんたん所の田圃……

お国 ほろよ、泣き面に蜂じや。もう駄目じやろ
う。今頼も、田圃堀り返して了うてみんな大豆
播くかのうて云うたんじや、うちの父さんは朝
から役場に行つとるんじや。晝飯にも煮りやせ
ん。

お氏 なしてね？

お国 ポンプを借ろう思うてだろうて……

お氏 ポンプ？

お国 うん、ポンプを稼付けで、谷から水を揚げる
んじや……

お氏 大変じやねえ。

お国 だいたい、めんむ子ヨロ／＼、し水の水のなめ所
を田圃にするのが間違いかも知れん。そいじや

あ、（とびつとをひく）

お氏 あのお金のことば遠慮なしに云うてきんさい
よ。

お国 え、有難とう。（と顔をくいしばつてびつ
こを引いて去る）

青年 （青年はそれを鬼送つて）なんだかわれが悪
いかにいじやね

お氏 そんなことはなあ、（と笑う）

青年 あ、疲れた。おばさん、水を一杯のまして呉
れんさい。

お氏 どうぞ／＼。（奥に入つて土瓶とコップを持
つて来る。）さ、沢山のんで下さい。

（青年は二杯水をのむ）

青年 あ、うまかつた。実際はくのも楽じやない
のう。

お氏 何処へ行つて来られたんの？

青年 この上の方よ。陽子を売つてみたんじや。お
ばさんとこ、陽半いらん？ 五枚強つとるんじ
や。残りもんじやけえ、安くしとくけえの。一
枚五円、五五二十五円、
お氏 三十円にしたら買つてもいい？

がのう。こんな空梅雨のことは今までなかつた
けえのう。

お氏 ほんとよねえ。

お国 それも、村の百姓みなが皆、駄目になるんじ
や一通死生であきらめもつくんじやが、村でも
たつた三軒か四軒じや。

（と、感さわまつて鼻をすする）

お氏 （喘息をついて）どうにかじらんものかのう
（向）

お国 あんたん所はえ、のう。去年無理して、工
事をしたけえ……

お氏 うちは大丈夫らしいんぢや。

お国 大丈夫とも、それに、花やらいろ／＼やっ
とられるけえ……（と喘息をつく）

（その時行商の青年が片手に籠を下げて、軍靴
をひきすつて上手より出て来て府の前に立つの
で、お国は「さ、帰ろう」と動く）

お氏 痛タタタツ

お氏 ま、悲かつたねえ、

お国 あい、なんでもないよ、たいしたことばな

青年 二十円？ 一枚四円、せいじや元値じや、だ

お氏 (笑って) 悪いね、元値じや

青年 え、残りもんに編みじや。

(お氏は笑って二十円払う)

お氏 あんた、そうやって売って歩いて商売になるのね？

青年 駄目よ、一枚七円に売って、百枚売ろうと思っ

たら、もう、くたくた、じや、こんなことは長く

は出来んのよ。

お氏 あんた、自転車で行ったらどうなの、歩いた

ら大変でしょうがね。

青年 ところが、自転車で行ける所にや、ちやんと

店があるけえの、歩いてでなけりや行けん所り

やないと売れんのです。

お氏 ふーん、そんな事するより、勤めた方がふか

ろうがねえ。

青年 だれど妙なものぞ、こんなことやつてると、

朝から晩まで、時間に縛られる勤め人の生活は

お氏 ふーん、そうかねえ。

二十本かの、

青年 一五本として六十円か。じやパンは？

お氏 さあ、宛に角全部で一日は百円は廻すの、百

五十円はあるの。

青年 一ヶ月四千五百円か。坐つていてもうけるん

だからいいの。

お氏 あんたもやりんさい。

青年 あ、場所がない。場所が、さ歸るうか

どうも有難どう。

お氏 い、えね、あんたもい、嫁さん貰つて早く落

着きなさい。

青年 死ねじやない、わしや、女房も子供もあるん

じや。

お氏 え、？ あ、そうね、(とびつくりする)

青年 ははは、さいなら。

お氏 さいなら。

(青年の去るのをお氏は見送る。首をふって、

さて、我に返つて奥に、そくさと入る。)

(露谷や、暗くなり夕日の日脚が伸びる

やがて、下等より百姓助助三分の一程中

味の入った焼酒の瓶をぶら下げて、酔っぱ

青年 (この村の田圃は悪いな。

お氏 水がながいのよねえ、この日黒じやねえ。

青年 しかし隣の村はいいぜ。

お氏 ほうね？

青年 もつとしつかり灌漑工事とやらなけりや駄目

だな。

お氏 ほうよ、それがなにしる食乏村じやけん。

青年 村長や村会役員が水サツとした奴だからいけ

んのだろ。灌漑工事は縣がやるんだ。つま

り、村長が果のお役人をひつぱつて来て、実状

をよく見せて、しかるのち、御案へでも行つて

とつくりと話しあわんけいけんのだろ。

お氏 まあ、ほうかね、なんでもむかしいもん

ね。

青年 世の中つてもんはね。(間 おばさん、

ラムネは一本をいくらもうけるの？

お氏 四円あるよ。割にいいねえ。

青年 ふーん。六円の仕入れ、一日に何本はけるの

？ 此処で？

お氏 あんた税務署の人みたいじやの。一五本から

らつて登場。(微吟)

助助 ふん、之が飲まずに居られますかいな。好き

なうにじやがれ、勝手なせられ、わしや、は

あ知らんけえ、へと氣凡に腰をおとす。わーい

おーい。お神さんや、お神さん！ 留守かいの

う。

お氏 はい。(出て来て) あんたかいのう。

助助 (真似して) あんたかいのう？ わしじや遅

かつたかい。

お氏 まあ、どうしてそがめに酔つて

助助 どうしたも、こうしたもありやせん、酒をの

んだから酔つぱらつたんじや。おそうさしまる

かい。コツプ、コツプ(と手をあげる)

お氏 まあ、そがめに酒をのんで、体に毒じやがめ

助助 えいよ、えいよ、わしの身体はわしが、皆よ

う知つとるよ。

(お氏は奥に入つて、橋半を皿に一枚と、コッ

プをむつて来る)

お氏 はい。

助助 いや有難どう、ほう、こりや同じや、あ、

矢張りお神さんは気がきくわう。奥庭へ行くと
うちの叔父なんか駄目じや。コッブって云やあ
コッブじか持つて来やせん。何かないかづて云
やあ、何もありませんって、フクが摸られたみ
だいに、ブートふくれるんじや。

お氏 (笑って) さつきお國さんが来ちやつたよ。
お晝御飯にも帰って来ん云うてたが、役場へ行
つてたのね。

勘助 ほらよ、俺は朝から村長ほんの帰るのを待つ
とんだんじや、収入役のお助節が村長は一寸出
て行つたんだから、酒を帰って来るといふもん
じやけえ、今か今かと待つとつたんじや。晝に
なつても戻らん、一瞬はなつても、二時が鳴つ
ても、こりやどうでも村長の奴、町のかくし
女の所へ行つたに違いないと思ふんじや。

お氏 (笑って) まさか。

勘助 いや。そうにきまつとる。あんな知らんのか
ほら下田の出来り娘と出来たんじや。

お氏 ほらね。そう云えば、下田の娘ほんをこの頃
見たわう。

勘助 ほらよ、村長は、あれを町へ連れてつて、飲

つばる。

勘助 (ふりほどいて) やだー、わしや帰らんと。
お前なんかノ頭見とうない。帰れ。わしや比叡

でのむんじや。

お國 何云うとるんの、此處は酒をのむ所じやな
い。お氏さんも迷惑じやけえに。

勘助 迷惑なんかかけあせん。わしや誰にも迷惑か
けちやおらん。オ、徳さんは何処へ行つた
き。わしや、徳さんと一緒に今からのむんじや

お氏 うちの、今居らんのか。町まで花を積ん
で行つたんじやが、もうおいかた戻らうと思ふ
んじやが。

お國 徳さんは、あんなのぶうに、晝のひなから
酒などのむもんね。……正月もあるまいし！

勘助 うるさい！ 馬鹿。

へと平手でビシマリと頬を打ち、お國がうつむ
いた所を頭の上から馬頭で二三回なぐる。そこ
へ、シマツにズボソ婆の確太が飛んで来る。

確太 お父さん！ やめんさい。やめんさい云うた
ら！ (と父をつかまえる)

勘助 えい、はなしやがれ、こいつ奴が、生意氣な

食店をさせとるんじや、フン下、人が知らんと
思つとるんじや。人間はみな二つづい、腰
をもつてゐるけんわう。

お氏 ほいであんな見たんね。
勘助 いやわしやまだ見たんが、(とうつむく)

(一面)

お氏 ほいで、ボンブは？
勘助 ほあ、もうもうしても手遅れじや、勘助節の
云うにや、果方に申込んであつて、直ぐ来る云う
んじやが、もう遅いよう、ええ、黄！ 黄！
勝手にせいや！、これがのま下に居られるかぶ
う、(と手杓をつごうとするが手がふるえて、
つげない。お氏は手松つてつがす)

くそ！、焼酒のんで死んでしまふんじや。
(と泣く)
(奥庭へ下手よりお國が素足で小走りに出て来
る)

お國 まあ、あんな、此處にいたんわ。どへ行つた
か思つて、いまさきから捜しておつたんじやに
、まあ、こがめに酔つて、……さ、確太も帰つ
て来とるんじや、早よう、いのう(と勘助をひ

確太 駄目だよ、お父さん。なぐつたりしや。
(父をおして縁に腰かけさせる)

勘助 ふし判つた。じや確太、のちう。お前と一
緒にのちう。

確太 わしや嫌じや、帰らう。お父さん、のむんじ
や、うちののむんじや。

勘助 うちののむんじや、お前には人の氣持がわからん
い。此處がえい。此處がえい、ま、わしの話を
きけ！

確太 お父さん。此處は迷惑じや。
勘助 ま、えいじやないか。

確太 わしや酒など、ほじうない！ 腹がへつてペ
コくじや。

勘助 勝手な奴じや！
確太 勝手なのはお父さんじやなあか！

勘助 馬鹿なれ！ お前には人の氣持がわからん
か。

確太 お父さんこそ人の氣持がわからんのか。衆
民主义的じや。

勘助 衆民主义的？ なんじやそりや、

確太 お父さんみたいは一人で酒をのんで、おまけに母さんを探ったりして、全く民主主義を知らん入るこつちや。

勘助 馬鹿いえー、民主主義って何だかお前は知つとらんか。

確太 お父さん知つとらんか。

勘助 知つとらんか。わしや前から考えとつたんじやが、今日も役場をつくづく考えたんじや、民主主義というものは、要するに、その人に親切にせよ、ということじや、何でもかんでも親切にするちゆうことが、民主主義なんじや、この村役場なんざめ、全く民主主義に反してらんじや、どうだらう。どうじや。

確太 ふん。

勘助 ふん、てえのは何だ、違うんか、違うんか、お前云うて見る。

確太 うん。えかろう。えかろう。

勘助 えかろうって、親切以外に何があるんじや、人殺の希望。

勘助 同じことじやなめか。人殺を希望するけに親切にするんじやなめか。

も田圃も、わしや、皆売つ払つて了らんじや、もう何もかもおしまいじや。

確太 ふん、出て行きますと、誰がこんなところに居ろかい。さ、お母さんも行のうや、（と行きかける）

お民 ま、そんなに寺を荒立てんぞ、みんな一寸した言葉の行き違ひじや、な、勘さん、確太さん、お国さん。

お国 （思ひかえして） うん。さ帰る。

お民 それに勘さん、今日は一日役場で村長さんをつつてな、くさくさしてしまふんじや、それでお酒もろんだしな、田圃のことを

確太 お父さんの心の苦しさを考えてあげてや、じやが、苦しいからって、お酒のんでまぎらわすのは卑怯じや。お父さんには心をまぎらわす酒があつても、お母さんには、それにかわる何もないんじや。お菓子一つたべるわけやなし、

勘助 映画一つ見にゆくわけやないんじや。

勘助 まだそんな事を云うどるのか。

確太 そんなに判つてらんじやつたら、何して、母さんにも親切にしないんじや、探つたりして

勘助 なに？ お国に？ 馬鹿なえ、こんな不親切で冷めたい女に、何を親切にせよならんのか

お国 まあ、この人は、云うことも程があるが、三度三度のおマンマを用意して、ないお金の工面したりする私の苦労が判らんのかい

勘助 不親切なのはあんたやないか。

確太 そうじや、自分は酒ばかり食うて、

勘助 なに？ 子供に何がわかるか。

確太 何時までも子供でいるかい。

勘助 コラ、貴様は、貴様は、

確太 ふん、コラとか貴様とか、昔の通達をつくりじや。

勘助 何を、生意氣な、馬鹿なれが、出て行け、お前みだいな奴は出ていけ、お国、お前

も一緒に出て行つて仕舞え、わしのうちを、一歩もまたぐことはならんぞ、えい、くそ、家

（と突然立ち上つて、手にした一升瓶をふり上げると中の酒が袖口から肩を濡らす。お民とお国があわてて止める、酒に濡れて勘助は益々いきり立つ）

馬鹿、馬鹿なれ！お前は月給もろうて来て、家に入れたことがあるんか、何じや、メホンじやの、靴ばかり買いやがつて、お前は誰に大き

くして貰うたんじや、えい、くそ、もう、こちえちやおれん！

（遂に勘助は男の力で二人の女の腕をふり払つて、近くにある樺をひろい、ふりまわして確太を追いかける。子守も帰つて来て、その大喧嘩にまきこまれる）

（お民とお国は、「あれ、誰か来て、誰か来て」と叫ぶ、其処へ仕事から帰重が何

戦車も帰つて来て、驚いて、勘助をだきとめる。）

勘助 えい、はなせ！放せ！もうがまんできん

のじや、

勘助

（と云いながら、勘助はさつきから傳が切れてゐるので、其処へ「ヘナ」と刺れて了う）

徳三 どうしたんじや。

（と、しやがむと、勘助は男泣きに泣き出す。）

お氏 ポンズの事がえ、がに行かんで、勘助さんは酒をのんだんじや……

（徳三、大きく溜息をする）

（其処へ一旦逃げた徳太が出て来る）

徳太 お母さん、わしや先に帰るからの。

お留 うん。

徳太 じや、どなたもお先に……（と去る）

（同）

お国 さあ、お父さん、わし等も帰ろうや、

勘助 うん。（と云つて尚も泣く）

（お国は勘助力手を自分の肩にかけようにしてうなずく、勘助は今は素直にお国にすがつて立ち上る）

お氏 大丈夫かね？ 送つていこうか。

お国 うん？ えい、大丈夫じや。

お氏 そう、気をつけて帰らんさいよ。
お国 えい、えらい済まんね。

（と去る）

（徳三とお氏並んで見送る）

（長い間）

お氏 （突然に）アッ！ くさいー 大変じや、

御飯がこげとる！ チイさん、早う早よういんで火を引いてや！

（子守はあわて、戸を入る）

（お氏は戸口を見るが再び、徳三のそばに

来て並ぶ。）

（同）

お氏 ねえ、お父ちゃん。

徳三 うん？

お氏 わしやの、つくづく人のことを思ひたりさいたりする度には、自分が一番幸福だと思ふよ、この

間省の山口さんもな、わしやおつかあ、の顔

を見ると、どうして、これがあんなに寂しがる

たんか思つて云うんじや、子供が為にはいつた

とる様なもんじやつて、わし等は本當になつた

り行つとると思ふので、わし、それに父ちゃん

は

（突然露白、やゝ、くらくなりて、遠い聲の音がする。）

徳三 オヤ、雷じや。（同） 雨が来るかな。

（更にやゝ近く又も雷。）

（風の音）

（突然、漸然たる雨の音おこる）

お氏 あゝ、雨じや、雨じや、

（二人は軒下に身をさけて頭や顔をぬぐい

着物をばらう。そして空を見上げる。

お氏 あゝ、これで勘助さんとこも……助かつたか

う。（同）よかつたなア。

（更に一層激しき雨の音）

（二人尚並んで空を見つめる内に――）

――第――

お氏 うちこそ、お父ちゃんを尊敬しとるじや、本
当にもつたいたい位大事にして貰うて……
徳三 それに、わし選にや、やましいいかどやい
う、ゆゑもあらんじやア。

（二人顔を見合せて笑う。お氏は情に堪えずして、そつと徳三の手を握る。）

（少しの間）

（風の音）

お氏 まあ、涼しい風――

（53）

か

ま

と

(二幕六場)

人物

馬淵	幸平	三十八才
幸	まき	三十五才
忍	幸一	十五才
娘	まの	十二才
祖母	お伊	六十才
青野	松田	二十七才
敵	吉本	三十二才
村人の声	中井	二十三才
時		一、二、三、
所		現代
	芥一	湖畔の農村

舞台は農家の居間が正面にあり、その隣りに奥の面がある形。左手は上段になり台所に続く、家の前は庭で道路に繋ぎ出入をする。台所口よりも出入が出来る。

来る仕組に反つてゐる。
昨夜着衣のまきが台所口から現われ、疲れている様子で縁側に腰を下ろし、何事か思案中である。
住時計が三時をうつ。はつとひとまきは眺め、いそを感ずる。かまどが暖いので火をたくと室全体が煙に包まれてしまう。

まきは目を押え、うずくまりながら薪をくべる。
農協の事務員、松田が上手より登場、暗闇で薪の持てる音。
松田 今日は何をおりですか、これあー、すごい煙だ。

まき はあ、何か用さ。
松田 今夜七時半から洋館で映画がありますから、みんなで観にきて下さい。面白いのだからこんありますよ。

まき 青野団がやるんかね。
松田 うん、解説は中井先生がやってくれるんだよ。

まづ うちの、まづの受封の先生だ。
大にや珍らしい、八千くしにいい先生だ。今夜
は正のしめだ。

松田 いやーして下さいよ。

まき 今いもがふけるから、一つ喰べていきなや。

松田 まだ知らせる所があるから急やんだよ、又こ
の次にいれます。

（忙しさに立去る。まき時計をのぞき、いもの
ふけ具合を箸で突きこしてみて、釜を下に
おろす。いもを箸に移しながら、煙で赤く
なつた取からおちる炭をふく。
鬼子の幸一が毎晩から歸ってくる。）

幸一 好やん、歸つた。

まき わや、今日は早えが、晩取の練習がどうした。

（煙のいもを喰べながら吸煙に）

幸一 今日は先生の都合で早くすんだんだ。

まき 田圃へいつてくるから、風呂を沸かしといて
や。

幸一 親やんとこの靴はボンア短えのけてくれる
と、毎日おやさんだ。

まき うちのつるべは深いんで、母やんも痛が痛
が。

あ。へまつの方をむいて。

母やんが今夜おんぼを脱帽履にいくから、めし
の仕度しとけといつてたぜ。

まき いもを喰べながら。

親やんも手振つてや。

（二人は仕度にかかると、幸一は時々裏へいっ
て風呂の薪をくべる仕事。おまはすこい
煙を吐き出すので二人はコンコンと吐く。

幸一 三日市に煙吸口をばわしたのにもう駄目だ。

煙いほあ、眼が痛くつて仕度かえや。

まき 隣のはい、は、めしもおかすも一匹に出る
仕度になつてくよ。今日家事の時間にお教諭した
んだだけ針目をみていると涙がひとりで出てく
るんだよ。

幸一 この煙のせいだ。

母やん毎日さ辛いだろうな。

（いきなり「二のくされかまど」とけりつけ
る。）

まき 親やん、よしなつてば、又はおやんに叱
られる。
（二人は奥にキラと眼をやり仕度をつづける。

いよ、阿とかしなくつちやと思っているんだ。
今夜七時半から学校で活動があるんさ。先生
言わなかつたかい。
家内中で行くから、まづお帰のたすぐのし仕
度をするようにな。

（戸棚の皿にいもを入れてまきは田圃に出て
いく。幸一は球を投げる型をしたり、バツ
チンゲの模倣をしていてだが、台所の奥へ消
える。つるべのさしる音と水筒がささえる。
上手より祖母のうげが口の中であつた言
いながら現われる。一見して何かに熱中し
ている態度。徳心仲間の印に白印の襟をつ
けた羽織を着ている。）

台所の柱の下にいつて、喉中から白紙に思
んだものをとりだし、うやうやしく擽けて
から一枚を糊紙に柱にはりつけて叩き
舞ひ舞へ引つこむ。炭のまのが帰ってくる。）

まき 帰つたよ。

（幸一が裏から入ってくるが、柱の札をみて
指先をボン／＼弾いてみる。）

幸一 帰んだ、狐のお守か、夜は早く寝てあるな。

舞台暗転

第二場

学校の扉を叩いて家に帰ってくる。上手か
ら幸一を先頭に、まきはまづの手をひき、
父親の幸一の顔。

幸一 だけ腹で外は着物（それぞれ一服を
を着ている）

まき 母やん、東京へ来て人が取みたいになくさ
んいるんだね。

まき そろよ、死ぬにーやん死物してえな。

幸一 バンビの天竺色は素晴らしいな。それに中
井先生の解説はラジオさくようだな。

（一同楽しく笑いながら家に上る。）

幸一 まづはしばらくおさけていたがすく
横になつて眠る。）

まき （手紙に折返を止むが、耳中此しくて、
今夜のように活動するなんて珍らしいもんだ。

（煙筒の煙草をのめかえ）

幸一 そろよ、只初くばかりが能くやねえ、活動見
ていて、幸一やまづにさかれても皆目わからねえ。

しかほい。

まさ お母さん、あいにく小娘しかないで、この次
に「しよ」くらえまいか。

しや 止候がない、今日は馬場の旗いことだ。

「ぶつ」きいながら出ていく。入れ違いに
まづがでつてくる。

まさ どうした今頃。

まづ 母ちゃんくよかつた。(振しげに近づきり)

けんや言うのを察したすか、水彩画の道具を賣ら
んと三百円いふんよ。

まさ 三百円も。(濁つたという水筒)

まづ うん。

まさ 一寸考えるが、竹園から金を出して渡
す。まづは「母ちゃん、おりがとー」とに
うしろ返つて出ていく。

手甲と御んをわけ、野良いとの辻をらし
ていくと、幸一の腹の古本先生が夢を
覗くす。

吉本 今日は。

まさ これは先生、幸一がいともお世話になつて
……。 (喉をすす)

をが邪魔しました。

「よき見送る」わがわがありがたの御茶いよ
した。吉本去る。

(舞台袖)

か 四 角

その夜、幸平の家。妻の松田青年が改改
かまどのパンフレットを展ずて、幸平とま
さに説明している。

まづ 幸一とまづが水彩画をかくている。

幸一 が大人の話しを耳をかくける。

松田 この一斗重が三千五百円、二斗重が五千四百円

煙草は五斗重から火事の心配はありません。幾
南の煙草を三斗重にすれば、出来れば一斗重にまで

いふです。煙草輸入の向上はまず、おまじから、
台所の改善ですね。

幸平 凄じ人の頑固さに困つてゐるんだ。

松田 現物を届えつけてしまえば問題ないでしょう。

まさ 何かくそうもいかねえ。

松田 じゃあ、あしたの晩、派手すから海へいこ
下さい。(帰りかけに幸一の顔を見て「うまいな

吉本 おまさん、お褒めありませんか。

まさ おかけ様で。

吉本 通りかかりにぬくさましたが、箱の出来は
いようですね。(縁に腰を下ろしあたりを廻る)

まさ 入展にいくとええですが。(茶を沖がそう
とする) (吉本手をふって止め)

吉本 いーんです、朝の腹が痛くてこの緊要困
に手帳を連れてきてゐるので、休憩時間によつて
んです。

まさ 幸一の事でも……。

吉本 一寸御話して下さる事がありまして、毎
日一斗重は五斗重の練習をしてかつたの
に、五日前から出てこなくなつたのです。幸一の若
も心配してさいてみる人ですが、喉つと喉をきり
ない、体が悪い体もなし、私もそれとなく幸本
こみるんですが、目に涙を一杯ためてゐるのです。
物事に感ぜやすい年頃ですから心配です。お家の
方々何かあつたのじやないですか。

まさ 別に……。

吉本 幸本に話を付けてみろと云ひ。あつた事が
ありまして知らせしますから。忙しいところ

あ「幸一と顔を見合せて笑う。「おやすみ」とい
つて去る。

幸平 さあ、今夜はどじようをとつて二ようか。

(ランブと食卓を手に取る)

まさ 明日は早いから、これなくとも帰りたい。

幸平 うん。すぐやる。(びくを腰につけて出て
いく) 子供達も一寸見送る。

幸一 母ちゃん。毎朝シジミとりにいくけどえらい
だろう。

まさ 川の氷は融つたより冷たいねえ。

幸一 改良かまどつて割に高いなあ。だけど欲しい
なあ。

まさ 五千円のを買おうと、父ちゃんはおじようを
とり、母ちゃんはおじようをとり、その介だけ野
めてゐるんだ。

(幸一うつむいてさいてゐる)

まさ お前、この腹野球をやめてるそうだが、どう
してだい、誰かいじ悪でもするんか。

幸一 ううん。そうじやない。

(返事に元気がない)

まさ 吉本先生も心配してきてくれたんだ。

幸一 え、先生が。(びつくりして額を上ずる)
 まき あんた、いゝ先生に心配かけちゃ、いけない
 よ。(幸一をばたける。明日からおやり、秋祭、や
 お前のほしがつてるスパイクも履つてやるよ。(隣
 りから声がかかる。「お前さん、風呂が湯もまだ
 だよ」)

(正ちあがり)

まき はい、お前さん、わらうかい。

(二人は浴中に時を度る。まつが湯を
 けに給をみていると表からしげが叩く。
 る。後をのぞいて)

しげ ふい、ふか、うめえもんだ。

(祖母のきげんが、いふよりいふのきまつ
 は釋意になつて道徳を、しげにみせる。)

まつ これ、おちやんに買つてもらった。三伯田し
 たんだよ。

しげ 今日か、(まつが「うん」とうなずくのを見
 て、みる／＼血相が変つてくる。ふるえ声で)

しげ おまきめ、どこへいった。

(幸一とまつはいざつて壁の隅にとける。)

しげ おらに内しよ、金をかくしてるだ、探して

うしろくれら」と言って、そばの壁をつかんで、
 まきを叩く。まき「あつ」と腕を押さえる。幸一
 が「おちやんの馬鹿」と叫んで、しげを突きどめ
 す。

まき あ、おちやん。

(地を蹴そうとするのを、しげは刺れたま、
 痛を振りまわして近よせまい。まきに幸一、
 まつがすがりついて泣く。奥口から戻つた幸
 平がこの光景を眺めて、辛い、悲しい表情の
 まきとつと壁をに置く。)

舞台暗転

五 場

幸平、まき、まつが晩飯を喰べている。

まつ おちやん、どこへいつてんだろ。

まき 野球の練習が罷くまにんだろ。

(公園が上より入つてくる。)

松田 今晩は、おちらに定めよした。

幸平 ここ、しばらく都合悪い、なんだ、かんだ休
 めてね。

松田 邪教が流行つて、年寄連中が入り降り、精神

やるぞー(よろけながら、そこをみつかり廻
 す。)

しげ 幸一お前どこかしらねえか。

幸一 しらねえ。

しげ まつしらねえか。(まつ黙つて首を横にふく)

(おちやん、あつち、こつち探すが、みつけれ
 ない。土間の上り板に寄りこみ、土をす
 る。そこへまきが風呂から戻ってくる。母の
 姿をみるとまつは俯がつく。おちやん)

まき また幸一とケンカしたのかい。

しげ おまき(暗みつく様に)おめえ、おらをよく
 もだましたな、金ねえだの抜かして、まきに三百
 円を買つてやつたさねえか。(まきうるたえて)

まき それにや色々おねえか。

しげ わけだ、お前さんの御本殿の坐り敷はさぞ
 金で定まる。お前さん、おちやん一番尻に坐ら
 す気だ。

まき そんなつもりじゃ、只かまどを買いたい
 ばかりに。

しげ かまど、つて、買当り。おちやんの服の裏に
 うは勝手はまねたせねえぞ。(いさなり、)

おちやん、入れ替ける。農村の奥の奥。こ
 れを駆逐するのは容易な事ぢやない。家産不祥の
 徴だ。(そこへ、女教師中井が靴を脱ぎこんでく
 る)

中井 幸一さん、帰つてますか。(壁を覗きし)あ
 、やつたりいつたんだわ。

まき 幸一が、どうかしたんですか、

中井 入変です、すぐ湖にいつて下さい。吉本先生
 が行つています、一人じやなくても……。

松田 よし、雷聲団を頼もう。(靴を脱ぐ)

中井 私が用事で、そこを去りますと、吉本先生が
 走つてくるのです。どうしたんですとさくど、こ
 れを(四、五枚の紙をポケットから出して幸平に
 渡す)

渡して、馬場へ行つてくれ、といつて湖の方へ走
 つていきました。私も一寸読みよしたけど、幸一と

んは湖へ船へ出ていふらしいです。(紙をとり巻
 いた手紙、まき、はだしのま、遠征の様にふり
 「幸一、幸一、」と叫んで靴を脱いでいく。

「おちやん、」とまつが後を追う。

中井 まつちやん、先生が居つておげるから泣か
 ないで、おちやんはきつと元氣を帰してくるわ。



とリ出し、群衆の手に引かれて馳つてする。群衆が覆かぶる、それになつきくり、なつき切つて上樹に叩きつける。やめてくれ、こゝは無切で幸一が丈夫に居るか。今まどお婆ンアも立派につけるぞ。

土間に勝びおり、鉄をふりあつ、「くそつ、くそつ」に叫びながらかまどを打ちこわす。上煙りがある。

「あんた、やめてく。」

とすべりつくが、渡切られて土間に尻をつく。幸平なにも鉄をふるう。一同幸平の腹に伝はれて果敢。

ひげはふゆくと並ぶが、放心状態になり、ばうたり倒れる。

まゝお婆さんへ馳けよる。町を二つす過ぎ三え
る中に 辨台(脂藏)

第六場

舞台は洞窟。向うに岨がぬかる形。

車卒と車一が砂利を入コツヲ箱に入れて

率平　　ムヒやすみするふ。

第一
うん。

（二人は箱に腰かけ、幸平は一服やる。）
幸平 おまじは五千圓のをふんばつした。今日から
煙くねえぞ。

幸一、母とやん、うれしうな、婆とやん、おの晩から、すつかり元の婆とやんにかえつて、あらあ、嬉しい事ばかりだよ。

準平 改竄かまどで炊いた飯め、うめえせ、みらう
んじ喰つく、うんじ坊く、秋にや反おたり、入壁
とつく、ポンプを買うぞ。方めえも野球に優勝し
る、父つちやんと談だ。ハッハッハ。

二人はだから笑う

華平 さあ、いくか、母ちゃんがヒントを煉つて
秤とくたびれてるぞ。

華一とつこいよ。

（二人は死にゆくかゝいで下手へ去る。）

釋

一九五三年二月

日
印
刷

一九五三年二月

發行

編集兼
発行人
東京都千代田区大手町一の七
労働省婦人少年局

、
発
行
人

労働省婦人少年局

印
刷
人

協
立
社

印刷所

東京都千代田区富士見町一／一六